

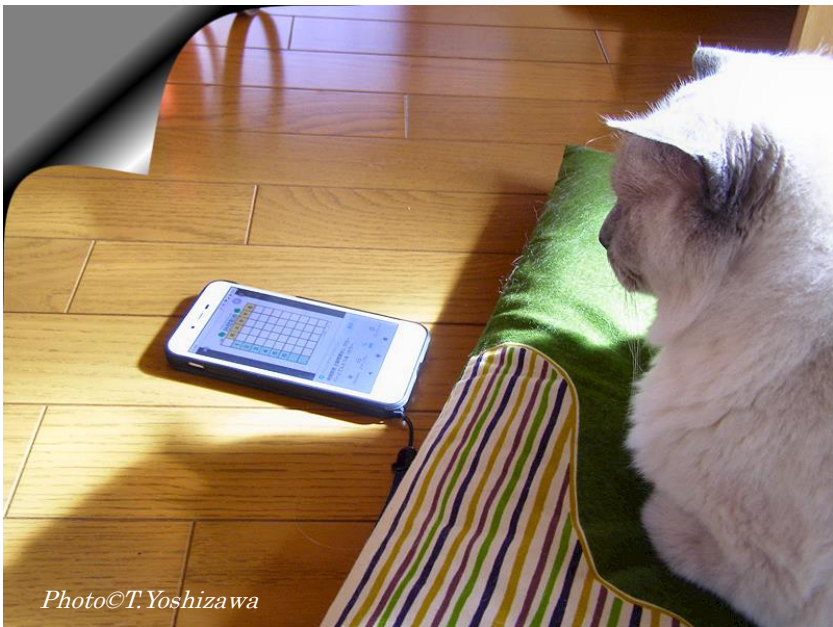
老後の時間割表（前編）

朝食を済ませ、着替えをして一階に下りていくと、妻の静子が台所で弁当をつくらせている最中だった。時刻は六時五分。七分には私は家を出るのだが、調理台に置かれた弁当箱を見ると、それまでに弁当は用意できそうもなかった。六分まで待ったところで、私は「行くよ」と彼女に声をかけて家を出た。結局、弁当は間に合わなかった。

あと数分待てば、弁当は用意できたのかもしれない。だが、その数分を私は待つことができない。何しろ私は毎朝六時七分に家を出ると決めているのだ。私は時間に厳格な定刻主義者である。

毎朝六時七分に家を出て、会社には七時七分に着く。時差通勤実施中の今、始業は三十分繰り上げで八時になっている。だから、数分家を出る時刻を遅らせても、始業には充分間に合うのだ。しかし、私は頑なに時間を厳守しようとする。偏屈な性格だと自分でも思う。

静子は私が「行くよ」と言ってもまだ黙々と弁当をつくり続けていた。せっかく私のためにつくってくれているのに、申し訳ないなと思う



Photo©T.Yoshizawa

吉澤 稔雄

つつ、私は家を出てバス停へと向かった。歩きながら、静子が自責の念に駆られていないかと気になった。いやいや、お前さんの所為じゃない。わるいのは俺なんだから……。

これまでもそんなことがなかったわけではない。しかし、手際が悪いとか、もう少し早めに起きていればとか、私は静子を詰ったことはない。私の勤めのある平日は毎朝私より三十分以上早起きをして、私のために弁当をつくらせてくれるのだ。それは彼女の善意そのもの。稀に私の出かける時刻に間に合わなかったとしても、それを非難すべき道理はない。

静子が私のところに嫁いできて三十二年が経つ。この間、彼女はほぼ毎日ずっと私のために弁当をつくり続けてきた。特に料理が上手いというわけではなかったが、彼女がつくるものには飽きさせない味があった。これまで私は彼女の手料理に文句を言ったことは一度もない。時に失敗して完全に火の通っていない焼き魚などが弁当に入っていたこともあったが、私はそれを紙に包んで職場のゴミ箱に捨て、帰宅してもそのことについては何も言わずにいた。

……もう三十二年が経つたのかと、私はあらためて静子と暮らしてきた日々を振り返った。結婚したのは私が三十七歳のときだった。あれから三十二年あまりが経ち、二か月後には私は七十歳の誕生日を迎えようとしている。そして、更にその半月後には定年退職することが決まっている。二度目の定年である。

十年前に最初の定年を迎えたが、そのとき勤めていたソフトウェア開発会社には再雇用の規定がなく、私は体よく追い出されてしまったのだった。技術者上がりの社長の目には、金を稼がない事務職など取るに足らない存在でしかなかった。代わりはいくらでもいる。ならば給料の安い若い人材を使った方がよいにきまっている。つまり、社長にしてみれば、定年を口実に首尾よく高給取りの穀潰しを厄介払いできたといったところだったのだろう。

しかし、当時、二人いる息子のうち、長男は大学三年生、次男は高校三年生で、翌年には大学進学を控えていた。定年を迎えたからといって、そのまま隠居暮らしに入るわけにはいかなかった。

退職してすぐに職探しを始めたが、希望する事務の仕事では、六十過ぎの老人を雇ってくれるような会社は何処にもなかった。採用条件の

「年齢不問」は、単なる雇用対策法に基づく募集広告上の配慮に過ぎないことを改めて思い知らされた。そもそも、高齢者の募集については、ほぼ警備や清掃やマンション管理の職種に限られているというのが実態だった。

当面は僅かな退職金と失業給付金で食い繋ぎ、これはと思う求人先にせつせと履歴書・職務経歴書を送り続けた。しかし、送り返されてくるのは「不本意ながら貴意に副い難く……」という決まり文句の不採用通知ばかり。こんな空しい生活が数か月も続くと、無能の烙印を何度も何度も押されたようで、自尊心もズタズタにされ、しばしば言いようのない絶望感に襲われた。

やがて失業給付は打ち切られ、退職金も底をついた。幸い、年金をもらえる年齢になっていた。幸い、失業給付が切れるとすぐに年金の受給手続きを済ませた。しかし、当座はこれで凌げるにしても、息子を二人とも大学を卒業させるとなると、いずれ生活が立ち行かなくなることには明らかだった。静子もパート勤めをしてはいたが、その稼ぎは小遣い程度の額でしかなかった。これまで通り家計を支えていくには、やはり私が稼ぐより他に方法がなかったのである。住んでいる家は、小さいながらも戸建ての持

ち家で、ローンもすでに完済していた。したがって家賃の支出がなく、その点は幸運だったと言わなければならない。アパート住まいで毎月家賃を払わなければならないとしたら、家族四人は食うだけでカツカツの生活を強いられたに違いない。

どうにかこうにか仕事にありついたのは、求職活動を始めて一年近く経った頃だった。職探しにこれほどの時間がかかってしまったのは、職種を事務に限定していたためだった。サラリーマンになって定年に至るまで総務関係の事務一筋でやってきて、それ以外の仕事を知らずにきたのだから、自分の能力を活かすにはやはり事務の仕事しかないと思い込んでいた。

しかし、よほど専門性の高い分野でもない限り、老人の事務職など世の中にはまったく需要がないことをもっと早めに認め、そして決断すべきだったのだ。

事務職を諦め、他の職種も視野に入れて活動を始めると、就職先は呆気ないほど簡単にきまっていた。都内にある印刷工場の納品受付の仕事だった。一年更新の契約社員で、給料は前職の三分の一ほどだった。しかし、その収入と年金を合わせれば、息子二人を大学に通わせながらもどうにか生活していける目途は立った。

新たに就いた仕事は、当初私にはとても新鮮に感じられた。所属は管理部総務課となっていたが、管理部門は本社にあり、現場の工場勤務の私には部下もいなければ直属の上司もいない、謂わば一匹狼の一兵卒の身。成果の問われる仕事ではなかったから、気も楽だった。おまけに僅か二畳ほどの狭いながらもエアコン付きの専用個室が与えられ、暇な時間にはその個室で自由に過ごすことができた。

与えられた仕事の大半は納品物の受付業務だった。印刷工場だから、毎日大量の紙が搬入されてくる。しかし、搬入業者のトラックの来る時間帯はほぼ限られており、午前と午後それぞれ一時間ほどのピークがあるだけだった。荷下ろし時にフォークリフトを誘導し、置き場所を指定する。納品書を受け取って納品物を確認し、受領書に判を押して返す。その後、搬入された紙の山に作業指示書を貼り付ける。たったそれだけの仕事だった。

印刷用の紙のほかには、インクやローラー等の印刷機に関わる消耗品類の納品があったが、これらの納品に関しては通常現場の責任者に取り次ぐだけで済んだ。

そんなわけで、一日の労働時間は八時間だったが、実働時間は二〜三時間に過ぎず、残りの

時間はすべて待機時間となった。

暇な仕事だった。繁忙期で印刷や加工の現場がどれほど忙しくとも、私の持ち場では残業は皆無だったから、毎日定時ぴったりに仕事を終え、家に帰ることができた。定刻主義者の私には、これが何よりも有難かった。

刺激の乏しい仕事で、待遇も決してよくはなかったが、居心地だけはよい職場だった。

振り返ればこの工場に勤めた九年間はあつという間だった。五年前、六十五歳になったとき、次男がその年の春に大学を卒業していたので、私は引退を考えたこともあった。しかし、急激な変化を好まぬ性格と職場の居心地のよさから、私はそのままずると居続けた。毎年の労働契約の更新時に本社の人事担当者から「来年もまたよろしくお願いします」と頼まれ、その言葉に私自身の存在価値が多少なりとも認められたような気がして、それがまた勤めを続ける励みにもなった。

その九年間の勤めが間もなく終わろうとしていた。二か月後には古希を迎えるが、身体はいたって健康。体力・知力・気力いずれも衰えてはいない。仕事はまだまだ続けられると思いはあるが、七十で契約期間満了が就業規則上の決まりならば、それはそれで致し方のないこ

と諦めるしかない。とりあえず役目は終わる。私の代わりはいくらでもいる。つまり、その程度の仕事だったのである。

目指すバス停は家から南に歩いて数分のところ、環状七号線沿いのペット・ショップの前にあった。そのバス停に着いて何分も経たないうちに西新井駅行きのバスがやって来た。そこから乗車する客は私だけだった。

門前仲町の駅を出て深川不動の境内を抜け、葛西橋通りを東に向かって歩いてみると、冬木弁天堂に差し掛かったところで後ろから声を掛けられた。振り返ると藤野由里子が足早に近づいて来るところだった。私は歩みを緩め、彼女が私の横に並ぶのを待った。

「歩くの、速いんですね」

その少し間延びしたような物言いからは、彼女のおっとりした人の良さが窺われた。

「まあね、せっかちなもんだから」

言いながら、私は彼女の方を見て笑みを返した。

こうして彼女と肩を並べて歩くのは初めてのことであった。そもそも同じ工場に勤務してはいるものの、普段は言葉を交わすことはない。彼女の所属は生産管理部で、同じ工場内の別棟

に事務所があった。話をする機会は年に三回、会社主催の新年会と夏の暑気払い、そして年末の仕事納めの納会の時と限られていた。しかし、この二年間は新型コロナ・ウィルスの感染予防のため、いずれの飲み会も中止になっていた。だから、彼女と言葉を交わすのは実に久々のことなのであった。

「あの……近々会社をお辞めになると聞いたんですけど」

「そう、定年ですよ。二度目の定年」

「二度目の定年って、七十になられるんですか？ わたし、知りませんでした」

「もつと若いと思っていた？」

「はい、そんなお歳には見えないですもの」

「ありがとうございます。でも、たぶん藤野さんのお父さんより私の方が年上でしょう」

「父と同じくらいかと思っていました」

「お父さんはいくらですか？」

「今年の十二月で六十になります。田舎暮らしですから、老け込むのも早いです」

父親が六十だとすると、彼女はいったいいくつなのだろうかと思はされた。私は彼女の年齢を知らなかった。見た目には二十代半ばと思われたが、実際はもつと上なのかもしれない。男はね、老けるのが早いんですよ。白髪にな

ったり、ハゲちゃったり」

「そうかもしれない。父もハゲてます」

彼女はそう言つて、マスク越しに華やかな笑顔を私の方に向けた。晩夏の朝日が彼女の額を照らし、その白く透明な肌が一層輝いて見えた。

「それにお腹も出ているんですよ。その点、明道さんはスリムでダンディですよんね」

「あつ、いや、そうまじまじと見ないでくださいよ。恥ずかしいじゃないですか」

私は彼女の視線に照れて、年甲斐もなく顔を赤らめた。

「ところで、出勤はいつまでなんですか？」

「来月の二十二日が最後ですかね。退職日が十一月の十五日で、その前に余った有給休暇を全部消化しますから、九月二十三日から休みに入ります」

「もう一か月もないんですね」

「そう、九年はあつという間でした」

「お疲れさまでした。お元気でいてくださいね」

「ありがとうございます。藤野さんもお元気でね」
東西を流れる仙台堀川から分岐して南に流れる平久川が近かった。その平久川に架かる大和橋の手前の交差点を左に折れると、仙台堀川に架かる鉄橋のような武骨な骨組みの亀久橋が見えた。橋の中程に差し掛かって正面を見る

と、銀色に輝いて屹立する東京スカイツリーの威容が現れた。

「実は、私も近々会社を辞めるんですよ」

「えっ！」

彼女の唐突な表白に私はそれ以上返す言葉がなかった。

亀久橋を渡り切ったところの交差点で私は彼女と別れた。別れ際に彼女は深々と一礼し、そして事務所の方に向かってまっすぐに歩いて行った。

交差点を右に曲がると、すぐに工場側の入口があった。私服に着替えた夜勤明けの若い印刷工が数人、ビルの外階段を下りてくる場所だった。

九月に入って間もなく、藤野由里子の姿を見かけなくなった。最初は体調でも崩して休んでいるのだろうと思つたが、休みが数日続いたところで、もしかしたらと私は思い始めた。彼女の言っていた「近々」とは、九月十五日の締日を指していたのだろう。そして今は残っていた有給休暇を消化しているところに違いないと思ひ至った。

しかし、私の周囲では誰も彼女のことを話題にする者はいなかった。そもそも若い女子社員

の極端に少ない職場で、親しく話をする相手もいなかったと思われる。彼女が何故辞めたのか、その事情を知る者もいなかったに違いない。

住所も知らず、電話番号もメール・アドレスも聞いてはいなかった。これで彼女との接点は完全に消えたと思つた。

夕食の支度を済ませた妻の静子が缶ビールとグラスを持つて食卓についたとき、私は彼女に藤野由里子のことを話してみた。すると、静子は意外なことを言つた。

「それは逃げたということでしょう」

「そう、何もかも投げ出して逃げたのよ。その藤野さんって、いくつだった？」

「さあて、いくつになるのかな。俺が今の会社に入ったときにはすでにいたから、九年以上は会社にいたことになる」

「高卒で入社したのなら二十七以上、短大か専門学校卒なら二十九以上、四大卒なら三十一以上ね。女にとっては微妙な年齢だわ」

「何が微妙なのさ？」

「適齢期の呪縛よ。女は普通三十間近になると結婚を意識して急に焦りだすの。わたしもそうだった」

「今時適齢期なんて関係ないんじゃないの？」

「それがそうでもないのよ。婚期を逃すと古い

世代からは嫁き遅れと見られてプレッシャーをかけられるし、生物学的には出産の限界に近づいてもくるし。そういう意味で女にとって三十という年齢はひとつの限界点なのよ」

「その呪縛の所為で居たたまれなくなって逃げだすわけか」

「居づらくなって、精神的にも不安になって、姿を消してしまいたいと思つたり……」

「自分でもそう思い悩んでいた時期があつたのか？」

「まあね」

「すると、その頃識り合つた俺はおまえの救世主だったわけだ」

「そう、その時はね」

「何だ、今はそうじゃないみたいだな」

「だって、その頃わたしは呪縛にかかつていたんだもん」

静子はビールを飲み干すと、そう言つて笑つた。

静子の勤める区民センターは家から歩いて十分足らずの所にある。区民事務所、図書館、老人館、児童館、学童保育室などを含む区の複合施設で、そこで彼女は受付やら事務やらの仕

事を担当している。

区民センターでは様々な催しやサークル活動が行われているが、中でも老人を対象としたサークル活動に特に力を入れているようだ。それだけ暇を持て余した孤独な老人が多いということなのだろう。つまり、区民センターの老人館がそういう老人たちの社交場になっているわけだ。

静子が毎月持ち帰ってくるセンターの月間行事予定表を見ると、そこには「バンパー」「吹矢」「囲碁」「将棋」「麻雀」「書道」「フラダンス」「輪踊り」「手芸」「塗り絵」「カラオケ」「民謡」などの行事開催日の予定が記されていた。しかし、残念ながら、これらのサークル活動の中に私の関心を惹くものは皆無であつた。

定年を迎えリタイアした老人にとって、有り余る時間をどう過ごすかは大きな問題である。私の場合、自宅と会社の往復で二時間半、会社での拘束が九時間、都合毎日十一時間半ほどを仕事に割いてきた。それがすっかり空いてしまふのだ。たまの休日を無為に過ごすことはこれまでにもあつたが、さすがにこの先ずっと毎日無為の日々を送るなど、到底私には考えられない。自由気ままに余生を送るなどと言えば聞こえはよいが、ただ無為の日々を過ごすだけなら、

その実態は廢人にも等しいものだろう。そんな生き方は私の望むところではない。

加えて私は、きまつた時間にきまつた行動をとるといふ偏屈な性格の定刻主義者だ。その前提にはきつちりと組まれた予定がなければならぬ。

それにしても、退職後に区民センターに通い、地域の老人たちに交ってサークル活動をすることはなさそうだと、センターの月間予定表を見て私は思った。一言で言って、趣味が違い過ぎた。

唯一区民センター内で利用価値がありそうなのが図書館だが、これとてもその規模から蔵書数は充分ではなく、私の知的好奇心を満たしてくれそうな本は極めて少ないというのが実情だ。せめて落ち着いて読書のできる空間があればよいが、この図書館は貸し出しがメインのようで、館内に大きなテーブルのある閲覧席は用意されていない。これでは定期的に図書館に通おうという気にはなれない。

結局、私のようなインチキゲンチャのディスプレイタントには、地域に根差す公共の大衆迎合施設などは無用の長物でしかないということか。

そうだとしたら、私は専ら自宅で趣味に耽るしかない。エッセイや小説を書き、それがあ

程度の分量になったら、印刷・製本・装丁をして、本をつくる。私自身がつくったホームページがあるので、作品をそこで公開する。もちろん、本を読むのは私の趣味の内でも重要な部分を占めるから、これも予定表に組み込まなければならぬ。語学の勉強も兼ねて、英語やフランス語の本を読むのもよいかもしれない。いずれもこれまでにやってきたことだ。

しかし、こうした私の趣味は他者を必要としない。まったく一人きりで楽しむ孤独な営みである。

問題はリタイア後に人との交わりをどう保つかだ。一人暮らしの老人なら、ずっと部屋に籠ってまったく言葉が発しない寂しい日々を過ごすことになるのかもしれないが、幸い私は同居する家族がいる。親しくつき合っている友人も何人かはおり、ほぼ毎月のように会っては酒を酌み交わしている。だから、無理をしないで地元の人たちと交流を図る必要もないわけだ。

地元には小中学校の同期生がまだ数多くいることは知っている。しかし、卒業と同時に縁は切れ、その後一切のつき合いはない。区民センターに入入りすれば、小中学校の同期生に会う可能性は十分あるだろう。しかし、中学卒業

から半世紀以上も経ってしまった今では、会ったところで新たな関係性を築くことはなさそうに思われた。

毎日紙を運んでくるトラックのドライバーたちの顔ぶれはほぼきまつていた。皆気のない連中で、話好きが多かった。私も彼らとは素で接することができ、気軽に話をするのができた。年代的にも私に近い人が多かった所為もあり、高年齢者が多かったのだ。六十で定年となり、その後嘱託やアルバイトの身分でドライバ―の仕事が続いている人たちだった。

しかし、ほぼ毎日のように顔を合わせ、世間話をしながらも、ついぞ私は彼らの名前を知らずにきた。

だから、私は秘かに彼らにニックネームをつけていた。例えば、トラックを下りてきて挨拶する時、「おはようございます」「こんにちわ」の代わりに「まいどお」と言うドライバーには「毎度のおっちゃん」というように。そして、ケンタッキー・フライド・チキンの創業者にそっくりなドライバーは「ケンタさん」、いつも「しらおい」という品名の上質紙を持って来るのは「白老さん」、「ハイラッキー」という両面コート厚紙を持って来る「高運さん」、福島

訛りの（福島さん）、真夏でも長袖シャツを着て、その袖口から彫物を覗かせている（倶利伽羅さん）等々……。

ある時、私が工場の前を通りかかった白人の老夫婦に木場の現代美術館への道を尋ねられ、道案内をしていたところ、ちようどそこにやってきた倶利伽羅さんがそれを見て、「英語喋れるんすね。スゴイツすね」と言つて驚いていた。それ以来、彼は私を「先生」と呼び、紙を運んで来る度に缶コーヒーやらペットボトル入りの飲料やらを差し入れてくれるのだった。

九月も三週目に入り、残りの出社日が一週間ほどになったところで、これまで慣れ親しんできたドライバーたちがやって来る度に、私は近々退職する旨を彼らに伝え、世話になった礼を述べた。

「何よ、退職つて？ もう六十になるん？ 六十五か？」

トラックの荷台からフォークリフトでパレットに積んだ紙の山を下ろし、工場入口脇の紙置場にそれを置いたところで、白老さんは少し驚いたような口調で言った。

「いや、七十ですよ」

「ああ、そうかい？ もうそんなになるんだ。そんな歳にや全然見えねえけんどな」

「ま、会社の決まりだから、しかたがないですよ。六十なら雇用継続、七十ならお払い箱ね」

「んで、後釜は決まってるん？」

「いや、まだのようですね。募集をかけても応募がないみたい。給料安いですから」

「そう言ったって、受付が居なきゃ困るべな。会社も困るだろうし、俺たち運転手だつて困るわな。……会社も冷てえよな」

「会社なんてどこもそんなもんでしょ。人事権のある経営者が現場を知らないんだから。特に世襲の二代目三代目の経営者は人の価値を知らない」

「そうなんだよな。俺たちみてえな末端の労働者なんかはさ、使い捨ての駒としか見られてねえかんな。俺も人のことなんか言つてらんねえ。あと一年ちよつとで俺もクビさ」

そう言つて白老さんは初秋の澄んだ青空を見上げた。羽田を発つた旅客機が東の空を横切つて北に向かつて飛んで行くところだった。

「……仕事辞めたらさ、人生悲惨だよ。その分収入ガタツと減っちゃうし、少ねえ年金だけじゃ食つていくのも大変だ。それに仕事をしねえとなつたら、ほかにやるのがねえ」

「そう、それがいちばんの問題ですよね」

働いてきてよ、暇を楽しむ時間なんてろくなかつたから、趣味なんてありやしねえ。暇になつたらよ、パチンコやるか酒飲むしかやるのがねえんだわ。だからね、俺たち運転手は仕事辞めるとよ、みんな小原庄助さんになっちゃうんだ。みんなそうだよ」

「朝寝、朝酒……ですか？」

「そうよ。んでもつて、飲み過ぎてよ、直に病気になるつてヨイヨイになっちゃうんよ。……そう言や、マルソー運輸の小原さん、あんたも知つてんだろ？」

「ああ、いつもパレットだけ取りに来てた……」

「あの人、しばらく前によ、有明の倉庫に紙取りに行つて、トラックから下りた途端に倒れちやつてよ、救急車で病院に運ばれたんだわ」

「それは私も聞きました。脳内出血だつて」

「そう、下手すりやヨイヨイになるところだつたけれど、その前に死んじまつたな」

「亡くなられたんですか」

「うん、一週間くれえ前にそう聞いた。あの人、酒好きだったかんな」

「そう言つて白老さんはトラックに戻り、助手席から飴の袋を取り出して私に差し出した。私はそれを有難く頂戴した。」

「こん次来る時にやもう会えねえかもしんね

えな。さびしいね、あんたがいなくなると」

白老さんはトラックに乗り込むとエンジンを始動させ、助手席側の窓を開けて手を振った。「じゃあ、元気でな」

トラックはディーゼル・エンジンの音を響かせながら三ツ目通りの方に向かってゆつくりと走り出した。その先には仙台堀川に隔てられた木場公園の南北のエリアをつなぐ巨大なハープのような斜張橋の一部がビルの谷間に見えていた。

秋の彼岸の墓参りは、毎年中日の前の日曜日と定めていた。中日には道路も墓地も混むので、それを避けるためだった。

詣でる墓は二か所。私の家である明道家の墓と妻の家である井ノ上家の墓で、明道家の墓は草加市内に、そして井ノ上家の墓が春日部市内にあった。いずれも新造の墓で、代々受け継がれてきたものではない。すでに鬼籍に入ったそれぞれの両親がそこに眠っていた。私と静子は毎年、正月、春秋の彼岸、盆と、年に四回、欠かさず両家の墓を詣でることを習わしとしてきた。

静子には妹が一人いるだけで、それぞれ他家に嫁して家を出ているから、井ノ上の家を継ぐ

者はいない。したがって、井ノ上家の墓は静子の代で絶えてしまうことになる。だから、私は努めて墓参りの折は井ノ上の墓にも行くようにしていたのである。

いずれの墓も駅から離れたところにあり、車で行くしかなかった。

朝の十時に車で自宅を出発して、草加市青柳の三覚院の墓所に着くのは十一時前。墓参りを済ませ、次に春日部へと向かう。新方袋の満蔵寺に着くのは十二時頃になる。

東武野田線の線路と国道十六号線とが交差する辺りから北西方向に広がる袋状の農地の中に満蔵寺はあった。門を抜けて境内に入ると、正面の本堂の左側に墓所が広がっている。井ノ上家の墓はその一番奥まったところに建っている。

横長の赤みを帯びた御影石の墓石の正面には大きく「心」の一字が刻まれていた。十六年前、静子の母を埋葬する折、能筆だった父親が書いた字をそのまま石屋に彫ってもらった。静子の父はその墓石に敢えて家名を入れなかった。

墓前に花を供え、線香を手向けて私と静子が交互に手を合わせて額づくくと、裏の杉木立から時季遅れのツクツクボウシの声が聞こえてき

た。風が渡り、竹林の葉叢にさざめきが走った。今年の六月末に静子の母の十七回忌を済ませたばかりだった。そして、来年の六月には静子の父の七回忌が控えていた。

「母が亡くなって十六年、父が亡くなって五年。あつという間に月日が経っていくわね」

静子が墓石の「心」の文字を見つめながら言った。

「それだけ俺たちも歳を重ねてきたということさ。気がつけば、いつの間にか俺たちも老人になっていった」

「嫌あね、老人だなんて言わないでよ」
「でも、それが現実さ。そろそろ俺たちにも自らの老いに真摯に対峙しなければならぬ時が来ているのかもしれない」

そう言いながら、私は義父の晩年の姿を思い浮かべていた。

私が静子と知り合った年、義父は六十歳で定年を迎え、それまで勤めていた鉄道会社を退職して子会社に転籍となった。その翌年の春に私と静子は結婚し、そしてその秋には静子の妹も結婚して、二人の娘たちは相次いで家を出た。

義父母にしてみれば、年頃の娘たちが片付いて一安心といったところだったろう。しかし、

その一方で家族が急に減ってしまったことに一抹の寂しさも覚えていたに違いない。

そんな両親の心中を慮ってか、静子はしばしば春日部の実家に帰りがたがった。自ずと私も彼女について行くことが多くなり、次第に井ノ上の家に馴染んでいった。義父はよい酒飲み相手ができたと言って喜んでくれた。

私と静子が結婚した翌年の夏、待望の長男が生まれた。それからほどなくして静子の妹の懐妊が判明した。こうして次々と孫ができること、静子の両親はそれをいたく喜んだ。

長男が生まれてからというものの、土日の休日にはほぼ毎週、私と静子は長男を連れて泊りがけで井ノ上の家を訪れた。静子の妹の嫁ぎ先が近かったことから、しばしば義妹夫婦も生まれて間もない長男を連れて合流するようになり、土日ともなると井ノ上の家はたいへんな賑わいを呈した。三年後には義妹のところに次男が生まれ、それを追うようにして静子も次男を出産した。新たに孫が二人増えて、井ノ上家の賑わいは更に増した。

その頃が義父母にとってはいちばん幸せな時期ではなかったかと思われる。

私の次男が生まれる一年前、義父は六十五歳で二度目の定年を迎え、会社勤めを辞めて隠居

生活に入った。しかし、当時はまだ心身ともに健康だったから、有り余る時間を持て余していた。そのうち、「いきいきクラブ」と称する趣味のサークル活動が近くの公民館で行われていることを知り、義父は書道のサークルに入って活動を始めた。

もともと義父は書が得意で、筆の扱いにも慣れており、またその筆跡は美しく見事であった。直に師範の会長からその手筋を認められ、サークル内の仲間たちからも一目置かれるようになって、義父は嬉々としてサークルの会場に通い続けた。

仲間が集い、親密さが増してくれば、サークル活動後にお茶を飲みに行ったり、会食をしたりするようになるのは当然のこと。そのグループの内に異性がいれば、老人といえども特別に親しくなって秘かな付き合いに発展することもあり得るだろう。

公民館のサークルに足繫く通ううちに、義父はある女性と親しくなった。義父よりもその女性の方が積極的だった。親密になれば、サークル活動のない日でも、義父は誘いに応じて彼女に会いに出かけるようになった。義母にはもちろん内緒で。

しかし、内緒ごとというのは案外露見しやす

いものである。義父の不審な行動は直に義母の知るところとなった。

杉戸の在の豪農の家に生まれ育った義母は、祖父や父の不行跡をさんざん見てきたことから、夫の不謹慎な所業に嫌悪感を抱いた。例え会ってただお茶を飲むだけのことであったとしても、それは自分に対する背信行為と映った。

義父母の間に一悶着があった。そしてこの一件は、義父が謝り、書道サークルを退会することで決着がついた。

それから数年は穏やかな日々が続いた。義父はほとんど家に引き籠って、出かけることも少なくなった。時には以前の職場の友人たちとゴルフに行くようなこともあったが、それも月に一度あるかないかで、ただ毎週やってくる孫たちに会うのを唯一の楽しみとしていた。

義父が古希を迎えた頃から、義母は体調が思わしくなくなり、入退院を繰り返すようになった。もとより糖尿病を患っていて、その合併症がかなり進行していたのだった。特に心臓の状態がよくなかった。担当の医師からは心筋の壊死がかなり拡がっていると言われていた。

義母が入院している間、義父は一人暮らしを余儀なくされた。それまで炊事や洗濯などの家事は一切してこなかったから、生きるための雑

事の大変さをあらためて思い知らされた。しかし、それは言ってみれば予行演習のようなものだった。

義父が喜寿を迎えた年の七月末に義母は他界した。心筋梗塞による心不全が原因だった。

こうして五十年近く連れ添った妻を喪い、義父はまったくの一人つきりになってしまった。

そんな義父を気遣って、静子と私は、義母がいなくなった後も、できるだけ春日部の井ノ上の家を訪問し続けた。しかし、すでに子どもたちも大きくなり、日曜日は部活があったりして、泊りがけで行くことはなくなつたし、毎週というわけにもいかななくなつていった。

毎週土曜日になると、朝のうちに義父から電話がかかってくるようになった。そして、開口一番、「今日は来られるのか？」と尋ねるのだった。義父が私たちの来訪を心待ちにしていることは容易に察せられた。しかし、時には私たちの都合により行けないこともあって、その旨を伝えると、義父は「そうか……」と言ってしばし絶句した。電話口で悄然としている義父の姿がありありと想像された。

義母が亡くなって数年もしないうちに、義父の体力は衰えの兆候を現しはじめた。とりわけ脚力が極端に落ちたのは、家に引き籠って外に

出ることがほとんどなくなつてしまった所為だろう。外に出るのは近所のスーパーに買い物に行くときだけで、そのスーパーと歩いて数分の距離でしかなかった。その行きだか帰りだかに義父は道路で転倒し、怪我をしたことがあった。幸い、肘を擦りむいた程度の軽傷で済んだが、娘の静子にはそれが単なる偶然の事故とは思われず、漠とした不安を感じさせたようだった。

老いは確実に、そして思いのほか足早にやつてきた。

齢八十を目前にして、義父は急に体調を崩し、春日部市内の病院に入院することになった。甲狀腺機能の低下が疑われたが、検査の結果からはホルモン値の顕著な低下は認められず、原因はよくわからなかった。身体が思うように動かなくなり、筋力低下により歩行が困難になっていた。気力も衰えており、軽度の鬱状態にあるのではないとも言われた。

とりあえず入院はしたものの、病状の改善は見られなかった。とりわけ困ったのは、一人でトイレに行つて用を足せなくなつてしまったことだった。このため義父は要介護認定を受け、病院付属の介護老人保健施設に移された。

しかし、これは家庭への復帰や自立支援を目

的とする施設であつたから、症状の改善が見込めないとなれば長居はできず、三か月もすると退所を迫られた。

そこで施設のケアマネージャーに相談して転院先の病院を紹介してもらい、越谷市内のリハビリ科のある病院に移ることになった。

ところが、ここでもまた新たな問題が起こつた。義父に認知症の疑いが出てきたのである。静子は薄々それには気がついてきたのかもしれない。しかし、医師からあらためてそう言われると、静子は愕然として一瞬間の中が真っ白になつた。

この病院もまた三か月ほどで出なければならなかった。静子と義妹は慌てて老人ホーム探しに奔走した。そして、春日部市郊外にできて間もない特別養護老人ホームに空きがあるのを見つけ、何とか入所に漕ぎつけた。

その特養ホームは、春日部市の北のはずれ、国道十六号線の北側に広がる広大な田んぼの中にポツンと建つていた。

私と静子は毎週そこに通い続け、田園の季節の移ろいを義父とともに眺めて休日の一時を過ごした。

義父は次第に異次元の別世界の人になりつつあるように私には思われた。(つづく)